憂あるべき事なり、人參の品數もいろ〳〵あり、何れが是なりや、老衞門曰、足下のいふごとく、漢土にては、藥方の常にて、生姜、人參、趣を同じふす、和邦は、人參の價高貴なるを以て、人參を組藥方にても、大體は人參なしにこれを用ゆ、今人參の功とする所は、專ら暴に脫するの元氣を補ひ、又は虛勞の元氣を助るを以てす、然れども暴脫の元氣を回復し、請虛の元氣を補ふのみにあらず、よく客邪を除、津液を潤す、故に發散の藥方にまた多くこれを組、和漢つかひかたの同じからざる趣は、價の貴不貴による物なり、生姜亦その功人參に劣るべからず、和邦生姜の澤山なるを以て、人參の如くたつとまず、人常になれて、その功を思ふものなし、漢土は土地によつて生姜のなき所あり、北京のあたりは、大にその價貴く、人參生姜とならべ思ふ趣見えたり、

〔青囊瑣探上〕人參、生薑、

凡物價貴則人重之、價賤則輕之、世人當有病用人參、則秤之而正其毫釐者甚嚴也、而至用生薑幾片、則委奴婢手、不敢顧焉、假令其用一片薑有乾潤、切有厚薄、而輕重每不等也、嘗閱奇效醫述曰、生薑三片爲引、約重二錢云々、然則一片重六分六釐餘也、若夫使生薑價如人參甚穹、則世人必可正其權衡矣、噫臨病立湯方、猶向師立陣法、雖生薑有時爲將、雖人參有時爲卒、豈可以價賤常多輕視之乎、世醫亦恬然以此任病家、可以發一笑也、

〔たはれぐさ上〕それがしわかき時、むさしにありしに、其頃までは、人參を用ふるくすしはなはだまれなり、もしも人參を用ふるくすしあれば、下手なりといへり、世の人人參の功あることを知らずとて、杉某といへるくすし、つねにうれへとして語りき、そのゝち李士材、蕭萬與などいへるものゝ方書世に行はれ、けふ此頃に至りては、かろき病にも人參を用ひざるくすしはすくなし、

〔辨醫斷上〕人蔘

人蔘之說最謬妄矣、乃說而若行、弗啻有害我國之生靈、亦將貽笑於異邦識者歟、何也、夫人參補益之